

## 土木という仕事

今からちょうど25年前に大学を卒業しコンサル会社を経て父の経営する土木会社に入った。私は子供の頃から父の仕事に憧れ、良く現場に付いていった事を覚えている。国道の防災工事や、山間部の治山工事、道路の改良工事などは大好きだった、なぜなら人の命を守る大事な仕事だといつも言い聞かされていたからだ。常に仕事に誇りをもち、社員からも親父と慕われる父が大好きだった。私が会社に入った当時はある程度の仕事でも2名程度で現場の対応ができ、現場、書類、発注者の対応などもしっかり行い、現場は非常に面白く、工程が進捗することなど毎日が楽しかった。その当時から思うと現在は、公共事業の考え方、技術力、国民の関心、入札制度などはかなり様変わりした。まとまった規模の工事や、規制の伴う工事、点在する工事などは5名程度張り付け無ければならぬくらい多忙だ。また、設計照査、現場推進会議、変更、協議資料など非常に内業が多く、書類を求められる事も有り、現場に出られないことも多い。書面でのやりとりは大切な事ではあるが、良い現場を目指すのか、良い書類を目指しているのかと錯覚するくらいだと感じる。現場の技術者は、自分達の目的となるベクトルの方向が良くわからないことも多いと思う。プロセスを求められ事は良い製品をつくる上では大切な事であるが、目的に対する以外のプロセスも求められることも多いのではないかと感じる。プロセスは手段ではあるが、最終目的にはならないはずだ。また、現場に従事する技術者は最近では笑顔がない。なぜなら、安全に関する配慮も含め、非常に軽微な事でも管理し、それに伴う業務も多忙であり、責任も重いからだろう。

毎年建設業の就業者数も減り、若手の人材を求めるが、今のままでは、報酬が増えても入職する人は増えないかもしれない。今後ますます厳しい状況にむかうだろう。どの現場を見ても、いつも同じベテランの技術者が現場をまとめている。若手が伸びてきていないのは弊社だけだろうか。これからはベテランと若手の混合チームでの現場が必要ではないかと思う。ノウハウの伝承、一番大切なのはコミュニケーション技術ではないか。いずれにせよ経営者として現在の現場の状況を変えること、楽しい現場にすること、完成後に喜ばれる現場になるようにできないか共に必死で考えたいと思う。業界のみんなが、土木の大切さ、仕事の生きがい、誇りを取り戻す為に頑張りたいと思う。

長瀬 雅彦